

『法華玄義』における三観

野 本 覚 成

1

三観は天台大師智顛（五三八―五九七）の重要な教学原理の一つである。それは天台智顛によつて大成されている仏教法門でもある。

しかし、三観は四教と同じく、三大部中でもそれだけのための章もなく、完全な型でそれだけのために説かれた書籍も存在していない。『三観義』二巻という、その成立からすると天台智顛にとつてはいささか不本意とも思われる著書が現存しているが、この書物は三観を概説していて、大体の概念は把握できる。それは次第三観と一心三観とで概説されているが、天台義における完璧な三観の書とは思えない。

この書はもともと天台義における『維摩経』注釈の玄義分を述べる書の一部であつて、現存『維摩玄疏』巻二（大正蔵三八巻）に約半分に消滅された型で見られる。その削減の75％は下巻の一心三観の十乘観法を中心に行われている。いわば書直しの際に削られたのは三観説のもつとも重要と思われる

部分なのである。^①

この意味で削減された書も、されない書も完全な独立書とするには不安定な要件を持つていといわねばならない。また、三観にはこのような無礙自在な特徴があるのであろう。そしてこれは天台学の特徴でもある。

天台智顛の書籍の中には、また諸々の型で三観が論述されていて、それぞれ一様ではない。それも晩年の著述に三観論述が見られる傾向にある。しかし、教学の基盤は中観派に属することからも、基本的に若年から意識は不変であると考えられる。したがつて、教学の組織は晩年に至るほど円熟してより機能的に表現されていると思われるのである。

三観は、天台智顛の著作の処々に、種々に見られるが、基本的には空観・仮観・中観と次第する次第三観と、初心に即空即仮即中を成ずる一心三観とに区別される。いうまでもなく、天台教学の究極は一心三観が常に行われる能力を養うことにある訳だが、それが種々に説示されているのである。

『摩訶止観』には特に、そのみに見られる詳説された断惑行としての三観の実修を十乘観法の第四破法編に挙げることができ、『法華文句』にはいわゆる託事観を詳細に見ることが出来る。

『法華玄義』十卷、教相門随一の書には、どのように三観が説示されているのであろうか。三観に託事、約行、附法の三種観法があるうち、破法編のごときは約行観と見て良いだろう。『法華玄義』にはほとんど附法観としての三観が説かれている。その三観は『三観義』の如く解り易く平易に説くという手段ではなく、むしろ達意的である。また比較にならないほど豊かである。

これらの三観説示文を集合させ、整理することにより、天台義における三観義が総合できる訳であるし、またそれが必要な程に種々に説示されているのである。これらの三観説示文の拾集が、現存しない諸師著述目録上の「三観義」という書物³ではないかと考えられる。もちろん『法華玄義』のみが対象ではないだろう。

2

『法華玄義』の全体では何故か、前半に多く(2/3)三観説が見られる。二巻目が最も多く二十回以上見られ、一巻に九回、三・四・六・八巻も十回以上見られる。

科文では、第一釈名玄義は六卷半ほど占めるがこれが約七

割強の三観説が見られ、ほとんど迹門十妙に三観説があり、本門十妙以降は一卷ほど占めるがわずかに二回見られるのみである。迹門十妙中でも境妙の十三回、行妙十一回、利益妙八回、位妙七回、智妙六回、あとは二回ずつ見られるが、説法妙には一度も見られない。

第二弁体玄義は第八巻からおよそ一卷を占めるが十一回見られる。第五判教玄義は第十巻の一卷を占めるが二回見られるだけ。第三明宗玄義・第四論用玄義には一回も三観説が見られない。境妙はおよそ一卷を占めながら、十三回見られるが、第五判教玄義はおよそ一卷を占めるが2回しか見られないのは内容上の必要によるものである。

したがって、教判にさほど三観は必要とされていないことが解る。むしろ、教学の内容に必要なもので、対外的教学説明ではさほど重視されていない。教学の組織構成の表面にはさほど出ない、という意味で実践行観としての本来の性格が示されていると考えられる。

3

『法華玄義』の三観は次の25分類の如き型で見られる。³

A 法華経の経体として、B 二諦との併説、C 三諦との併説、D 三軌と併説、E 二智三智と併説、F 化法四教と併説、G 行位と併説、H 三種教相(頓・漸・不定)と併説、I 四句分別と併説、J 四土と併説、K 四悉檀と併説、L 四諦と併説、

M五陰五境等と併説、N五味と併説、O十如と併説、P十法界(二乘・仏)と併説、Q十二因縁と併説、R善惡慈悲と併説、S託事観として述べる、T三諦三観の妙観法、U四種三昧と併説、V断惑として述べる、W二十五三昧と併説、X三昧・禅観として述べる、Y諸典籍と併説、さらに三観ではない三観に類似するものがあるが一応これははぶくことにする。

十二因縁が中観派の智顛をして「即空即仮即中」という言いで表現されるが、三観の基本としてある十二因縁との併説は、わずか一回(「因縁法」ならば多い)であるが、これは基本的論述というより達意的に述べている『法華玄義』の三観を性格づけるものである。

また、約行観にしても、託事観にしてもそれぞれ見られるが、いわゆる付法観的な論旨が多く見られる。これがほとんどである。ただしこの三種観法は複合的に用いられていて、断定的に三種のそれぞれが異つてゐる訳ではない。約行観は常に付法観の説明が併い、託事観は常に約行観が伴つてゐる訳であるし、相互に重層してゐると考えなくてはならないのは当然であろう。

また25分類した三観の文は、次の例に見られるように単にその法と三観だけではなく、種々の法も同時に併説してゐる。

不定観者……即是毒在乳中。即能殺人。若有人発三四

弘誓願修六度。体仮入空。無生四諦観……即是毒生蘇。殺人也。……修從空出假。修無量四諦観。是毒至熟蘇。而殺人。若有下坐禪修中道。自性等禪正観。学無作四聖諦。行法華般舟等四種三昧。豁然心悟得無忍生。即是醍醐行中殺人也。(大正藏三三06下)

これを分類する場合、不定観と五味、四諦、四種三昧が重説されていると見る。さらに……の略文部分にも見られるが、これは直接的な三観の説明とは見ないではぶいた。このように考え方によつては問題が出てくるものもあるが、単純明快にするためにこのようにした。

このように見ると、『摩訶止観』の一念三千説は、附法観的にとらえると十界、三世間、十如の複合的三観、一心三観の説示である。円頓止観としての一心三観の附法観的論説であることが知られるのである。

- 1 『三観義』所説の法門(天台学报二十一号、昭和五十四年一月) 拙稿参照。
- 2 最澄撰『三観義』一卷、円仁撰『三観義』一卷、安然撰『三観義私記』三卷、良源撰『三観義私記』一卷、覚超撰『三観義私記』一卷、凝然撰『三観義』(以上『釈教目録』『竜刺録』『台祖密目』『日本天台録』『謙順録』『諸宗章疏録』より)。その他二十師による『三観義私記』なる書が見られる。源信撰『三観義』(現存『三界義私記』は三界(欲・色・無・色)の説明が主旨となつてゐる。
- 3 『法華玄義』における三観の構造(大学大学院研究論集三号、昭和五十四年三月) 拙稿参照。

(大正大学総合仏教研究所研究員)